

井口喜源治記念館講演会 資料

平成
29
年
10
月
21
日

研成義塾と井口喜源治記念館

「井口喜源治聖書傍注」 はしがき

川田
殖

井口喜源治 聖書の書き込み(写真)

井口喜源治聖書傍注

凡例

創世記 一～四章

馬太傳福音書 一～七章

馬太傳福音書 一～七章

明治版
大正版

井口喜源治聖書傍注 公開について

NPO 法人 今井館教友会のホームページにて、2017年10月より、順次公開いたします。

URL <http://www.imaikankyoyukai.or.jp/>

検索 今井館教友会

井口喜源治記念館と聖書傍注 ボタンをクリックしてください。

NPO 法人 今井館教友会

〒152-0031 東京都目黒区中根 1-14-9
TEL/FAX 03-3723-5479



研成義塾と井口喜源治記念館

井口喜源治は、明治三年（一八七〇年）徳高町に生まれ、徳高の研成学校支校保等学校（後の東穂高小学校）に入学。松本中学校から明治法律学校に進むが学業なかばで、長野県の小学校の先生となり、上高井の小布施、松本開智小学校より東穂高小学校に勤務。同級生で新宿に中村屋を開業した相馬愛蔵等の始めた東穂高禁酒会に加わり「芸妓置屋設置」に反対運動を続け、排斥され公職を去る。

明治三十一年（一八九八年）相馬愛蔵、相馬安兵衛、臼井喜代らの協力援助を受けて、私塾「研成義塾」を設立した。

当時の因襲にとらわれた農村にあつて小学校を終えた子女に、研成の精神をいかした「自由と独立」を基にした家庭的な教育を施してきた。

教師は井口一人で英語・数学・漢文や彼の信仰するキリスト教聖書などを教えた。研成義塾の目的は「よき人」になることにあり、黙々と農村の青年の教育に励み昭和七年（一九三二年）まで明治・大正・昭和と三十四年間に、八〇〇人近くの教え子を世に送り出した。

井口喜源治記念館は、教え子たちが主になって井口の没後三十年経った昭和四十四年（一九六九年）に設立された。

この記念館を創立したいという念願の中心は、「井口の書籍、写真、書簡、その他研成義塾で使用された教科書等を永久に保存したい」という願いから出発した。井口の薫陶を受けた人々の熱意と努力、そして各方面の有志者の真心と善意の拠出とが結晶体となって達成されたものである。

『安曇野 人間教育の源流』―研成義塾に学ぶ― 井口喜源治記念館 刊より

「井口喜源治聖書傍注」

はしがき

内村鑑三が「信州のペスタロッツチ」と称揚した井口喜源治（一八七〇（明3）年〜一九三八（昭和13）年は、一八九八（明31）年、アルプスの麓、安曇野の一角に研成義塾を建てて、若き人びとと共に、神を仰ぎ、友を信じ、志大にし、情操を深め、その感化を永遠に期して、真実の人格の育成に献身した偉丈夫であった。斉藤茂・横内三直編『井口喜源治』（一九五三（昭28）年、新版一九七八（昭53）年、井口喜源治記念館刊および、南安曇教育会刊）は、その面目を伝えて余す所がない。井口逝いてやがて八十年、その精神は今なお、否いよいよ、鮮烈に信州の、日本の教育の行方を照らす炬火である。

その井口の働きの源泉は、聖書一卷のうちに込められた神の恵みとそれに対する人間の応答の歴史であり、それをふまえて立つ人間の覚悟であった。そこに井口の心の拠り所があった。端正な字で遺愛の聖書の余白を埋め尽した傍注に見られる、凄まじいまでの聖書との取り組みの姿は、こんにちの私たちの盲点を如実に示すとともに、闇夜の光の所在をも示している。しかもその光・そのいのちは今もいささかも変わることなく、私たちの目と心を開かせ困難な生活の場・働きの場に勇氣と希望をもって立たせるであろう。

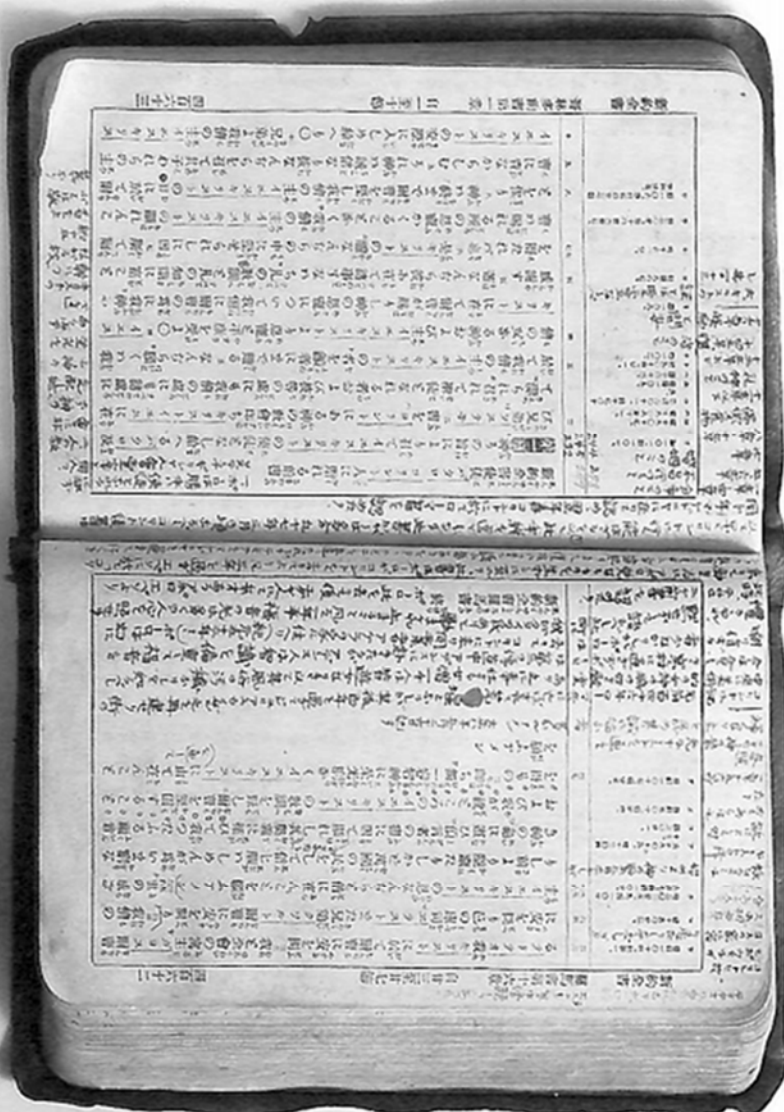
この思いをこめて、心ある友が井口とともに聖書に聴きそれに生きるべく、井口遺愛の聖書傍注を整理して公にできればとは私の多年の希いであった。しかし身辺の事情がそれを許さなかった私に代わって早くからこの希いに共感し、進んで編集・筆写の労を三十年にわたって担って下さったのは畏友水野威夫氏である。氏は長野県で小学校教諭を務めながら当時山梨医科大学に勤

務していた小生の所に内地留学され、ギリシャ語を学びプラトンや新約聖書とともに読み、その後も、本務はもちろん、上記の研鑽も孜孜として励んだ篤学の士である。

その仕事の詳細は同氏のあとがきに譲るが、このすべての背後には、同氏を中心とした幾多の有難い協力があったことを銘記しておきたい。さらにこれをワード化し、一般に読みやすくする作業には大山美根子（旧約）、井出秀（新約）のお二人の、全体を保管して広般の利用に供するには今井館教友会大山綱夫理事長はじめスタッフの方がたの、献身的なご協力をいただいた。溯ってこの貴重な聖書の複写を許された当時の井口記念館長・等々力古吾朗氏をはじめ歴代の館長、スタッフの方がたのご好意は忘れられない。あらためてここに感謝を捧げ、館のご清栄を祈る。

川田 殖

新約全書 明治三十七年刊
 井口喜源注 大正六年四月二十六日脱字
 の日付あり



井口喜源治 聖書の書き込み

凡例

○本書は、井口喜源治が使用した聖書（三冊）への書き込みを整理したものである。これらの聖書は、井口喜源治記念館に所蔵されている。内訳は以下の通り。

旧新約聖書	発行日	明治37年3月31日
新約聖書	発行日	大正6年10月5日
新約聖書	発行日	大正13年10月1日
		改版発行

○「聖書傍注」という名称は、聖書本文の傍らに書き込まれた注記を意味するものである。編集は以下の手順で行われた。

有志により、はじめに転記され、さらに電子テキスト化のために入力されたものである。なお、この度の編集は、傍注を読みやすく、利用しやすいことを優先した。

そのため、原本の表記を変更した箇所もある。

さらに、原本の破損や手書きのため、判読しきれない箇所もあった。

従って、さらなる研究の場合、オリジナル（原本）での確認が必要と思われる。

○聖書引照箇所を表記について

- ・井口による表記方法は、統一されていない。
- ・オリジナルを尊重しつつ、統一感と判別のしやすさを考慮して、以下の表記方法を用いた。
- ・書名は、凡例の通りとした。
- ・口語訳聖書で書名がカタカナで表記されるものは、ルビを付した。
- ・章は、漢数字で表記した。
- ・節は、アラビア数字の横組みとした。
- ・章節のみの表記は、傍注の対象となっている書名が略されることがある。
- ・なお、注の文中の表記は、これに該当しないことがある。

創世記一二章三節 ↓ 創一二 3

約翰壹書四章一八節 ↓ 約壹四 18

○聖書本文と語句は、次のように表記する。

1 「全文」○注本文…。

2 「天と地」↑注の文章が記載されていないものは、該当の語句に傍点・傍線などが付されたことを意味する。

○その他

- ・判読できなかった文字は、(□) (不明) と表記した。

創世記

第一章

○愚なる者は心の中に神無しと云へり。彼等は腐れたり。善を行ふ者無し（詩一四一）。

1 [全文]

○神 I am that I am 在りて在る者。無窮の実在者。

○創造、無きものをあらしむ。

○聖書の始は、神天地を造り給へり（旧約）。主イエスよ来りたまへ（黙示録）聖書の終。

○自然に出来たのではない。無意味につくったのではない。そこに尊き法則がある。

○これ単に神話ではない。

2 [地] ○直径八千哩、周囲二万五千哩。

〔神の露水の面を覆たりき〕

○流動

○鶏が卵をいだく如く。

- 4 「善と観たまへり」○満足せり。
- 5 「夕あり朝ありき」○ユダの一日は日没に始まり、日没にいたる。
- 11 「みづから核をもつ所の果を結ぶ樹」
○核を其内にもつ…。
○高等植物
- 14 「天の穹蒼に光明ありて」
○石炭時代、蒸気、雲、霧漸く晴れて、日月星辰始て天に現れたり。
○太陽は地球の百三十万倍
- 20 「水には生物」○生物、サンゴ、ウミウリ等、カイ類、クラゲ。
- 21 「動く諸の生物」○鱈一尾にて四百万粒の卵をうむ。悉く生長せば、一尾の雌魚より二十年にして地球の重さの五百万倍する鱈を産むべし。
- 24 「昆虫」○昆虫とは一説に四足に歩く小動物、たとへば鼠などを云へりと。爬虫類なるべし。
- 26 「我儕に像て我儕の像の如く我儕人を造り」
○人の肉体は獣の如く動物的なりとするも靈魂は神的なり。
○人は元来肉食動物として造られたるに非ず。他の動物も亦然るが如し。
○イザヤ一七に、獅子も牛の如く藁を食ひ云々とあり。
- 28 「^{うめ}生よ繁殖^{ふえ}よ地に満盈よ」○世界平均一方哩三十人、ベルギー三百五十人、十倍

第二章

○第二章は単に第一章の続きに非ずして更に之を細説する也。即ち主として人類の歴史を説く也。

1 「成ぬ」 ○完成せり。

〔衆群〕 ○衆群、日月星辰禽獸草木なり。

3 〔全文〕

○神聖は聖別也。神エレミヤに云ひけるは、我れ汝が胎を出でざりし先に、汝を聖め汝を立て、萬国の預言者となせりと。

○安息は單に休息する意に非ず。形而下の創造を了りて、形而上の働き即ち第一期に入り給へる也。イエス曰く「我父は今に至るまで働き給ふ。「我も亦働く也」(約^{ヨハ}五17)。

○宇宙完成の紀念祝日なり。物質的造化を竣へて心靈的事業に入れる也。神と共に働くは労働に非ざるなり。

4 「エホバ神」 ○一章に神をエロヒムと云ふ。力の神也。二章に始めてエホバと云ふ。恩恵の神也。即ち茲に始めて人類の歴史に入るを知るべし。

5 「土地を耕す人なかりければなり」 ○其成れるは三日第三紀

7 「生氣を其鼻に嘘入たまへり人即ち生靈となりぬ」

○第六紀

○人は動物と異り、萬物の靈長たる所は、其吹入れられし生氣に存す。

- 8 「園」 ○園はオアシスの如し。
- 9 「美麗く食ふに善き各種の樹」 ○サクラ、モミジ、クリ、クルミ、カキ、モモ、ナシ、ミカン
 「生命の樹」 ○トパンの木(？)
- 10 「善意を知の樹」 ○誘惑の木、戒の木、人の善悪知の木
 「河エデン」 ○アツシリヤ語平原
- 12 「ブドラク」 ○ゴムの一種
- 13 「クシ」 ○ナイル河の上流
- 14 「ヒデケル」 ○チゲリス
- 15 「埋め」 ○埋め、整理、守り、保存。人類世界に住むに方り神に対する義務また然り。
- 16 「全文」 ○人は自由なりと云ふ。然れども絶対に自由なるものに非ず。神の命に背きて絶対の自由を求むる時に、人は墮落に陥る也。
- 19 「アダム」 ○アダムとは土の意也。即ち前の人と同語也。希臘語ギリシャにては、人とは上を仰ぎ見る者の意。英語のマンは思考ある者の意也と云ふ。
- 「名く」 ○名くるとは解説するの意。彼をして天然を学ばしむる也。天然は人の善き友なれども、我等の心を會得する同情者には非ず。
- 21 「全文」 ○ヘブル語にては男を אָדָם と云ふ。之を女性的とせる אִשָּׁתָא 也。神はアダムにイサクを紹介するにあたりて之を眠らしめ幻影のうちに其相愛り相寄るべき真理を知らしめたまひしならん。

22 「全文」○何物か人体にまさりて優美なるものあらんや。汚れたる考えを以て見る時に、清き者も汚れを感ずる也。色眼鏡

の如し羞恥の念は罪を犯してより後に（□）したるものなり。先ず（□）をきよむべき也。

24 「二人一体となるべし」○二人一体とならんと欲する。

第三章

○神によらずして己の知恵を以て善悪を判断せんとす。而して其事が如何にも誇るべき善きこととの如く見ゆ（六節）。
○エレミヤ記二13、我民は二つの悪事をなせり。即ち活ける水の源なる我をすて、自ら水溜を掘れり。即ちやぶれたる水溜にして、水を持たざるものなり。これすべての悪事の根源なり。

6
〔全文〕

○女子は男子よりも誘惑に陥り易し。是れ虚栄を愛するによるか、又理をのちにして感情を先にするに依る。

○女子は虚栄を満足せんとし、男子は其愛に溺れて一家滅亡に陥る例多し。悪魔は此弱点に乗じて女を惑はしたり。

7
〔全文〕 ○目開けてとは、其考えが忽ち変りたるなり。潔き人には凡ての物潔し。心に主たる神を捨て、人は神聖なるべき身体につきて愧るに至る。

8
〔全文〕

○愛すべき神は、罪を犯してより恐るべきものとなれり。世に神無しと云ふは、自己の罪の現れんことを恐れてなり。凡て悪をなす者は光をにくみ、其行のところがめられざらんが為に光にきたらず（ヨハ、約三19）。

○静なる時、良心覚醒す。

10
〔全文〕

○ありのままは心の美なるしるし。修飾は常に墮落の徴也。

○汝何故裸なるを口実としてわが前をさげんとするや。

12 「全文」 ○汝は我命に叛きし者に非ずや。神に心中を看破されしアダムは、自己の罪を他に嫁せんとせり。世に罪を他人に負はしめて、自身潔白を装ふ事多し。妻はまた罪を蛇に帰せり。

15 「全文」

○女の胎に宿りし者終にゴルゴダの丘に於てサタンに勝てり。人類救済の約束は此に始れり。然れども其勝利の實の擧るまで、人類は其犯せし罪の為苦しまざるを得ず。

○神の命を信じ、劣つた信をはなれたるとき、愛と望は与へられた。

第四章

○カインとアベルとは其誠意を異にせり。人はすべての物をより受くるものなれば最も善き物を献るべきに、大抵カインと同じく餘り物を献ぐを常とす。神の喜び給ふは謙りたる魂なり。

○詩五〇17、自ら省みずして神をうらみ弟を嫉めり。

1 「カイン」 ○カインとは賜物の義なり。彼に感想の念存せり。

2 「アベル」 ○アベルとは、疲労の義也。アベルは寡欲の人。カインは多欲野心の人なりき。

3 「全文」 ○供物は感恩の記念なり。人に最も必要なるは酬恩の念也。世に無益なるものとして感謝の念を伴はざる供物の如きは無し。義務的慈善の如き皆カインの供物也。

6 「面をふする」 ○失望

7 「全文」 ○怒る勿れ、悪をなさざれば足る。善をなさざれば罪惡起り来る。聖書は始めより積極的道德を教ふる書なり。

「擧る」^{あぐ} ○面を

8 「全文」

○カインは終に神の聖諭をさとることを得ざりし。

○アベルの清浄に対して汚濁に (□) すること能はざりしカイン、義人迫害者の祖先なり。神はカインをして其罪惡を自白せしめて之を赦さんとせり。彼は慈み (□) とさと (□) 殺す (□) ぐに偽証 (□) なり。彼は全くの個人主義也。社

会の根底を破る者也。

10 「汝の弟の血の聲地より我に叫べり」○血痕歴然として声あるが如し。確証を如何せん。

12 「全文」○神よりのろわれ、又地よりのろわれたり。彼に喜びと満足となく憂愁を食ひてさすらいびととなるべし。

13 「全文」○カインは真にくだい改めしに非ず。只恐怖して減刑を乞ひ、且つ物質の損（不明）人を殺して己れの殺さるることを恐れた。

16 「全文」○神の善人は殺されて、地は遂に悪人の有に帰せり。地上に於ける悪人の跋扈は今日に始まるに非ず。悪人の為に処を儲くる（不明）。良き処を備へ給はざらんや。

「ノド」○ノドは追放の義なり。一説に支那人。

17 「全文」○邑は殺人者の建てたるものなり。都邑は罪惡の枢府也。其処に住める者の挙動の優美なるを以て貴しと思ふべからず。天然を去ること（□）遠く、俗智のみ長じ、誠実に代ふるに虚靈礼を以て天真なるを野蠻と称せり人の造りし習慣を以て、神の造りし天然の法則に代ふる者なり。多妻も亦罪人の裔によりて始められたり。妻妾を蓄ふものは、多くの人を殺すものなり。軍人程古来多の妻女を畜ふるもの無きを思ふべし。

19 「アダ」○かざり

「チラ」○かげ

20 「ユバル」○後のベドイン族なりて、旅人の掠奪に従ひし者はこの徒ならん。（以下、不明）

21 「全文」○美術勝つ時は信仰の衰ふる時也。エレミヤ、コロンウエル、ジョージ・フォックス皆美術を排斥せり。

22 「全文」○殺人は容易なる業となれり。

「ナアマ」○愛嬌

23 「全文」○最初の詩歌、レメクのツルギのうた。

25 「セツ」○代用

26 「此時人々エホバの名を呼ぶことをはじめたり」○最初の信仰復活

馬太傳福音書

明治版（元訳）

第一章

1 「アブラハム」○アブラハムは、キリストより二千年以前、洪水後凡^{およそ}三百年、カルデアのウルに生まれ、百才の時、其妻サラ九十才の時、イサクを生めり。百七十才にて死し、マクペラの洞に葬られたり。

「アブラハムの裔なる」○裔^こにして

3 「バレス」○ペレズ

「ザラ」○ゼラ

5 「ルツ」○ルツはモアブ人なり。

「ラハブ」○ラハブはエリコ城市の娼婦なり。

6 「ウリヤの妻」○バテシバ

7 〵 16 「全文」○ソロモンよりエホヤキンに至るまで十四代は悉くユダヤ人の王であつた。

アビヤ、アサ、ヨサバテ、ウツズヤ、ヨタムであつた。其他は悉く悪しき王であつた。積悪の結果国亡び、民は徒^{あゆみゆか}さ

れ、七十年間バビロン河のの畔に懺悔され、涙を流した。エホヤキン囚われてバビロンに連れゆかれ、其王の臣下となりてより、十四代の孫にあたるヨセフは、ナザレより何の良きもの出でんやと云われし、ガリラヤのナザレの貧しき大工であつた。ダビデの家（アブラハム）の家が衰落の極に達したる時に、イエスが生まれた。リンコルン曰く「神は特別に平民を愛し給ふ」と。

7
〜
11 「全文」

- 善王七人↓ソロモン、アサ、ヨサパテ、ウツズヤ、ヨタム、ヘゼキヤ、ヨシア
- 悪王七人↓レハバアム、アビア、ヨラム、アカズ、マナセ、アモン、エホヤキン

第二章

○偽の王と眞の王。ヘロデはエドム人であつた。エドム人と云ふは、イサクの子エサウの子孫である。博士の原語 Magi は彼斯ヘルシヤの占星学者の称である。

3 「全文」○ヘロデ王之を聞きて痛むは、驚倒する意なり。何故エルサレムの民は其音信を聞きて喜ばず、却つて驚き震へしかと云ふに、エルサレムに神の子を迎ふる準備がなかつたのである。今日主が再臨し給はば如何。喜ぶ者多きか、戦慄すも者多きか。ヘロデはローマ人の後援を得て僅かに王となつたのである。而して時の祭司、学者、長老は此偽王に諂へつらひて、眞の王の徳することなく、異邦人は却つて遠路わざわざ尋ね來りて、礼物を捧ぐ。イエスは生まれたる初めより其國人に歡迎せられざりき。

5 「預言者」○米迦ミカは前凡八百年、イザヤと同時代の預言者なり。

15 「預言者」○何西亜ホセアも亦イザヤ、ミカと殆ど同時代の預言者なり。

17 「エレミア」○エレミアは紀元前六百年頃の人。

18 「ラマ」○ラマはエルサレムの北方二里に在り。

「ラケル」 「其兒子」 「無によりて」

○ラケルはヤコブの妻にして紀元前約二千年の人。

○ラケルの子供とは、その子孫の意にして、ユダヤ人を云ふ。

23

○エレミヤの時代にバビロン人攻め入りて、之をとりこにして本国に送れり。無きによりてとは、ユダヤ国が空白地になりしなり。此預言は直接にイエスに關せるに非ず、バビロン王は捕虜をラマに集めてバビロンに送れり。ラケルの墓は、ベツレヘムの近くに在り。

「ナザレ」○ナザレはガリラヤの南にして、エルサレムの東北三十里に在り。

第三章

4 「駱駝の毛衣」○毛を以て織りたる

7～12 「全文」

○ヨハネがパリサイ人とサドカイ人を罵りしは、兩者共に欠点ありしが、自らそれを悟らせ、謙遜の態度を以て来らざりし故なり。パリサイの徒よ、我がバプテスマを形式なりと思ふ勿れ。サドカイの徒よ、我がバプテスマを此世的、政治的のものと思ふ勿れ。バプテスマは眞に悔改めなり。眞に悔改めたらば、其実を示せ。

○パリサイ派は、保守主義をとりて、国粹保存を主張し、サドカイ派は進歩主義をとりて、外国思想（主としてギリシヤ文明）の誘入を主唱したるが、パリサイ派は精神を忘れて形式に流れ、サドカイ派は、此世に重きを置き、政治を主とし、貴族的華美、驕奢に流れ、人間の甦り、靈魂の不滅を否定せり。

「蝮の裔よ」○蝮の裔よとは、偽善者よ也。

11 「全文」○ヨハネの天職は如何。イエスを天下に紹介するにありき。

13～17 「全文」○ヨハネは、イエスの来たりたるに驚けり。そは、イエスは罪無く、全く聖きものなればなり。罪無くして、悔改めのバプテスマを受けんとす。ヨハネ驚けること宜なり。イエスは何故にバプテスマを受けしか。イエスは罪人の友なるべく任せり。彼の最後は、罪無くして十字架にかかり、彼の始めは罪無くして罪人の中に交わりたり。彼は絶対に謙遜なりき。神が愛子と云ひ、精霊鳩の如く下れること理なりと云うべし。我等も傲然高ぶることなく、罪人の友、弱者の友とならば、神は必ず、我等を祝し給ふべし。

第四章

- 12 「全文」○ヨハネはヘロデヤの事につきて、ヘロデ・アンテパスの事をいさめ、獄に投ぜられ、後殺されたり。ヨハネを捕へたるは、イエスの生まれたる時、之を殺さんとせるヘロデ大王の第二子なり。後年ヘロデヤのすすめにより、王の称を得んとし、ローマに至りたるに、却て罪を得て、リオンに追放せられたり。
- 13 「全文」○ヤコブの子ゼブルンの子孫は、ガリラヤの北に住み、ナフタリの子孫はガリラヤの南に住めり。
「カペナウン」○湖の西北
- 17 「全文」
○時に年三十
- 24 「スリヤ」○地中海の東にして、パレスチナの東北にあたる。
「デカポリス」○デカは十、ポリスは邑、ガリラヤ湖の東南を云ふ。
- 25 「スリヤ」○地中海の東にして、パレスチナの東北にあたる。
「デカポリス」○デカは十、ポリスは邑、ガリラヤ湖の東南を云ふ。

第五章

○山上の垂訓は、主の祈禱を布衍したものである。

17
〔全文〕

○律法と預言者とは、旧約全書全体である。

○成就とは、旧約の書物を精神的に成就することである。

19
〔全文〕 ○教への小なるものに注意を怠るべからず。聖書に叶はせん為なりと所所にあるは、旧約を成就する意である。

41
〔全文〕 ○当時ローマの兵士は誰人をも捉へて、一リーグ、凡一里限り己れの荷を負はしむる權を有した。故に人々兵士をいとひ、其かけを望めば、即ち逃げかくれた。

第六章

21 「全文」 ○宝に束縛されてはならぬ。されるされぬは、宝の多少にはない。心の持ち方にある。

22 「全文」 ○身の燈は目也。眞理を悟り、神を信ず。靈の眼なり。目の悪い人は、体中暗く覚えられる。

23 「全文」 ○全身暗かるべしとは、暗黒を以て充つべしである。靈の眼の暗きは、肉の目の暗きより遙かに不幸也。光の神を内に宿さざる為なり。外の目の明かなるが如く、内の目も明らかでなくてはならぬ。

24 「全文」

○神に対して誠実、人に対して親切、其單純にして、専心神に向かわざるべからず。

○ロトの妻、名利も權勢も後まわしにして「財は財神」。只、神の御旨に従わねばならぬ。

○与えたまふものに満足し、人をうらやむな！

25 「全文」 ○「欲深き人の心と降る雪は、積もるにつれて道を忘る」。

金錢も神よりの預り物と思ひ、善きことの為に用いねばならぬ。

人は食ふ為に生きるのではなく、生きる為に食ふのである。しかも、其生きるのは、神に奉仕する為であることを知らねばならぬ。此根本本義を知りて、人間の本分を行ふ者を、神が飢しめ給ふ道理が無い。神に信頼して其本分を尽せ。

煩悶（生活）するな。

33 「全文」 ○たとへ巨万の富をつかむとも、神のわからぬ者は、眞の安心、眞の喜びなく、靈的の盲者である。而して靈の眼は如何にして開くか。イエスに接するにある。

〔全文〕

イエスは光である。其光に接して始めて、自分の眼が開くのである。

他の動物にかかることのあるべき筈がないからと人生觀は一変する。不平は去る。平和が来る。

一たび靈眼を開かれ、再び曇らざるよう注意すべきである。

○富の奴隸となることなく、悪に誘はるることなく、神に奉仕するには相当の苦勞がある。従つて克己努力も必要である。取越苦勞をして、今日のことを怠つてはならぬ。イエスキリストを信ずるによりて、其義を全ての信者に給ふてへだてなし。

○實際人を最も煩するものは、取越苦勞である。物質的のものもあれば、精神的のものもある。

第七章

1〜5 [全文]

○人を責むること軽く、己れを責むること重く、己れの欠点は塵も梁木の大小に見、人の過去は梁木の大小なるも、埃の小に見るべきである。

○悪に敵する勿れ。

○嘲むる者をいましむるは、耻はじを己れに得、悪しき人を責むる者は、疵を己れに得ん。

嘲る者を責むること勿れ。恐くは、彼れ汝を悪にくまん。知恵ある者をせめよ。彼れ汝を愛せん（箴七8）。

愚なる者の耳に語ることに勿れ。彼れ汝が言の示す悟りをいやしめん（箴三三9）。

3 [全文]

○前章二二の意。己れの目悪しくして、何ぞ人に目を明かにせよと云ふか。

○身の光は目也。

7〜14 [全文] ○恵みと祈りは、井のつるべの上下の如く。祈り上れば恵みは下り来る。汝、先ず神の國と其正しきとを求めよ。さらば（以下、欠）

12 [全文] ○この故に人は神の助けを祈らざるべからざる故に、人に善を行はざるべからず。神はかく愛也。故に汝の父の完全が如く、汝らも完全すべし。

馬太傳福音書

大正版（改訳）

第一章

- 1 「アブラハム」○アブラハムは紀元前二千年の人
- 21 「全文」○イエスとはエホバの神より出づる救と云ふ意なり。ヘブル語にてはヨシユア。希臘語にてはイエスと云ふ。
- 23 「全文」○賽七^{イザ}14
- 「インマヌエル」○ヘブル語

第二章

- 1 「ヘロデ王」○ヘロデ王の父はエドム人にて、アンテパネルと云ふ。ヘロデは狡猾にして、ローマの貴顕にへつらひ、ユダヤの内乱に乗じてローマ王の命により、ユダヤ王に封ぜられ、紀元前三十七年より四年に至るまでユダヤを支配せり。ヘロデ大王と云ふは之なり。
- 「ベツレヘム」○ベツレヘムはエルサレムの南方二里。ベツレヘムとナザレとは約三十里（へだた）距れり。ベツレヘムはダビデ王の生まれたる先祖の故郷なれば、戸籍につかんとて帰れるなり。
- 「博士たち」○三人なりと云ふ。博士の来る處バビロンならば、二百里以上。博士は占星者である。ペルシヤ方面、其当時占星術が盛んに行はれた。
- 6 「全文」○イエスは實に神よりつかはされたる王なり。靈魂を支配し給ふ永遠の王なり（ミカ米五2）。紀元前凡そ九百年、ダビデ王は凡一千年前。
- 11 「全文」○貴人に見ゆる時、礼物を捧ぐるは東方諸国の習慣であつた。
- 15 「全文」
○ホゼヤホセア一1、前凡七百年およその人。
- 16 「全文」○ヘロデ王の死にたるは、多分其翌年なりしならん。
○ベテレヘムの人口は、当時約四千人なりしと云ふ。
- 18 「全文」○ラマはエルサレムの北約二里。此預言は、直接にはエレミヤの時の事にて、バビロンの兵の為にユダヤ人の幼子

23

まで奪ひ去られたりとなり（耶三二^エ一五）。（エレミヤ、紀元前凡六百年の人）

「ラケル」○ラケルは紀元前約二千年、ヤコブの妻にてベテレヘムとエルサレムとの中間に葬られたり。（創三五一九）故に
此処にはユダヤ人の婦人と云ふ意なり。

「全文」○ルカ二二六によれば、ヨセフとマリアは始めよりナザレに住んで居たのである。ユダヤはアケラオ支配し、ガリ
ラヤは兄弟アンテパス之を支配。

第三章

- 7 12 「全文」○パリサイ人、サドカイ人はアブラハムの正統のユダヤ人なれば、それだけにて神の國に入りうると思つて居た。されど神は無價値なる、無資格なる異邦人、罪ある人、取税人をも化して、よくアブラハムの子となし給ふ。
- 9 「アブラハムの子」○アブラハムの子とは、信仰に於てアブラハムに倣^{なら}ふ者ではないか。肉に於てアブラハムの子孫たるも何の値あらん。

第四章

1 「全文」○能力が加はりて後に試み、イエスの生涯に最も重大な出来事の一つ、ミルトンの樂園の回復は之をうたったものである。イスラエルの歴史は荒野と離れぬ。モーセ、エリヤ、アモス、バプテスマのヨハネ、ポウロ皆そうである。荒野は偉人の鍛錬所であつた。エルサレムの東南十五、六里、急傾斜をなして、死海に下るところ、これユダの荒野である。修道院である。孤獨寂寞を感じる。父母も兄弟も友人も居ない。ロビンソン・クルーソーである。

2 「全文」○モーセは四十日四十夜シナイの山に居た。試みは人によつて、又境遇によつてちがふ。イエスは我が愛子なりとの御言を受けた。

3 〽11 「全文」○悪魔は之を疑はしめんとす。若し神の子ならばと。人に肉の食物あり、靈の食物あり。又神の命令なきに石をパンとしてはならぬ。イエスはすべてを神にまかせて居られた。神はパンをふらせ給ふか。御使によつて送り給ふか。イエスは従順の子供の如く、神の与へ給ふを待つて居た。イエスは石をパンとすることも出来た。しかし、神のさしずなくては何もなされなかつた。殊に食ふべからざるパンを食つてはならぬ。第一、イエスはこれ我愛子、わが悦ぶ者なりとの御声で充分満足。第二は、神を疑ひ、父の愛を試みしめんとするのである。イエスをして、父の愛を疑つて、証拠を奇跡に求めしむ。これ父の尊嚴をけがすものである。三位一体の關係を破るものである。第三、目的の為に手段は問ふ所にあらず。我を利用せよ、然らば勞少くして功倍せん。イエスは、神の國の建設に悪魔の助けは寸毫もかりることを要せずと。アダムはサタンに負けた。イエスはサタンに勝ち給ふた。サタンの目的は、イエスを神よりひきはなし、神のイエスを世にくだし給へる目的を、失敗に帰せしめんとしたのである。若し、此時悪魔に負けたならば、人類の救ひは世に来らな

ったのである。神我を愛するならば、直すくに此雪を消し給へ、此病氣を直にいやし給へ、我に巨万の富を与へ給へなど、神を疑ひ、試むることは不可なり。

○悪魔は、始めイエスの能力を試さしめんとした。次に父の愛を試さしめんとした。イエスの事業の完成は甚だ迂遠のやうであった。悪魔と妥協すれば近道のやうに見えた。キリストの途は悪魔の途とはちがった。

4 [全文] ○申八 3

6 [全文] ○悪魔は常に甘言を以て人をあざむく。生活問題も靈魂問題と離すことは出来ぬ。収賄事件は皆てうである。

7 [全文] ○申六 16

第五章

1 「山」○山は口碑によれば、ガリラヤ湖の西にあるハッテン山と云ふ岳ならんと云ふ。カペナウンを距る西南二里半。後世十字軍最後の戦は此辺なりしと云ふ。

3 〓 12 「全文」○天國の福音。俗人の幸福は主として外形。福音の云ふ所は主として内的。幸福なるかなと云ひても、其人が自ら幸福を感じると云ふではない。イエスは、神の子たる權威を以て、之を祝福し給ふたのである。

暗唱すべし。

「天國」○天國、此世にては、信仰に入りて歡喜と平和の心を与へられ、未來に於ては、神の國に入り得るもの。

3 「全文」○心に貧を感じ、己れの罪に泣き、義と聖を實現し得ざるを悲しみ、神の前に頭をもたげ得ざる者（路^{ルカ}一八12（13））。

4 「全文」○物の不足を悲しみ、位の低きを悲しむにあらざ。己れの罪を悲しみ、世の罪を悲しむ者。今直に慰めらるると云ふにあらざ、徐々として慰められるべしと云ふなり。

5 「全文」

○地をつぐは、此世の主人公となるのである。

○人に対しても、神に対しても柔和である（イエスの柔和、ヨブの柔和）。

6 「全文」○利をしたい、名をしたふではない。今日は殊に少ない暁天の星が、瓦礫中のダイヤモンドが、人の前に義人として立つてはない。神より義とせられんことを求むるのである。即ち罪のゆるしを願ふのである。飽くことを得るは、其一

半は此世に於て、一半は未来に於て。

8 「全文」 ○心の清き者の心に神の姿がうつる。心の清きとは、心にいつはりなき者である。（ナタナネに）正直者である。

9 「全文」 ○人と人との平和、又神と人との平和。

10 「全文」

○信仰に對する迫害である。迫害は眞の信仰の付隨物である。

○パウロ曰く「故に、我等信仰によりて義とせられたれば、神と和ぐことを得たり」（ロー五1）。かくの如きがキリスト者である、此理想を以て日々を送るべきである。

33 「全文」 ○誓ふ *swear* と誓願 *vow* とはちがふ。パウロ *vow* は誓を附して祈ることである。つまり、強度の祈りであるとするのである（士一11-31、母前11（10?）、徒一八18、二二17（以下））。スウェヤー *swear* は自己以外の物を以て、己れの誠実を証明せんとするのである。地は動かさずとも、己れの決心は動くこともある。信者は決心の動かざらんことを祈りても、保証はしない。誓ひは自己保証である。

第六章

1 [全文] ○公にすべきものは信仰、ひそかに行ふべきは善行である。

4 [全文] ○慈善をなしても、端から忘れてしまふ人は、眞の慈善家である。

9 [全文] ○信者の祈り。

12 [全文]

○太一八^{マツ}23参照

○我等心のうちに憎悪の念を抱く時は、其祈禱は聞かれるには余り不純となる。

19〜21 [全文] ○十九以下は十一の解釈と見ることが出来る。財とはひとり金銭を人に施すことではない。神の為に天國の為に働くこともそうである。

22 [全文] ○目は外の人の光である。靈魂は内の人の光である。

24 [全文]

○人は金第一と思ふか、神第一と思ふかに其人生觀は定まるのである。それ金を愛するは諸悪しきことの根なり。或人々之を慕ひて、信仰より迷ひ、さまざまの痛みを以て、自ら己れを刺し通せり（提前六^{テモ}10）。

○欲深き人の心と降る雪は、積もるにつれて道を忘る。金銭も神よりの預り物と思ひ、善きことのために用ひねばならぬ。

33 [全文] ○然り、何事をなすのも、神第一に働くべきである。御名の崇められんことと務むべきである。

第七章

○七章を約すれば、人は如何にして天國に入り得るかと云ふ問題である。第一、靈の目を開くこと。第二、神の為に働くべきこと。第三、永生を求めよ、即ち天國に入ることを求めよ。第四、天國の門は小さい。第五、世には天國に入るに、大なる門より入れんとする預言者あり。これは偽者なり。第六、聖書を学び、神の誠を實行せよ。

1 「全文」○單に批評する勿れとの意味ではない。自ら神の座に上りて、人を罪に定むるなどの意である。神の権能を侵してはならぬ。而もパリサイ人のなした所である。イエスは彼等の審く所となり給ふた。今日アメリカに行はるる私刑もそうである（羅一四4、雅四12）。人は己の目より梁木を取ることは出来ない。神より取つて頂くのである。即ち罪許され、靈の目が明かに見ゆるようになりて初めて、正当に罪を裁くことが出来るのである。しかし止むを得ざる限り、批評は慎むべきである。他人を批評するよりも、先づ己を省るべきである。批評するに当りては、なるべく寛大なるべきである。先づ悔改め（己れの罪を認めて）神を信すべきである。生まれたるままの人は、色盲の如きものである。其判断は正確ではない。人の審きは誤り易い。

「審かれ」○主として神に審かれ（太六14）。

1〜5 「全文」

○審くは、誰は善人なり、悪人なりと断定することである。

○哲学は知能の審き。宗教は心の審きである。眞に審きし者は神である。神の前にて全て裸にて現れる。

2 「己も裁かれ」 ○己も神と人にさばかれ

5 「全文」 ○人すでに其目より梁木を除かれたらば、始めて人の目の塵を取るべきである。其為に働くべきである。されど其道を軽んじてはならぬ。深き注意と祈りとを要する。

5 〽 6 「全文」 ○我等、人の審は（□）そるるに足らず、思ふべきは神の審なり。

「偽善者」 ○偽善者とは、他人の罪のみ見て、己れの罪を見ざる人。

7 〽 14 「全文」

○何事をなすにも祈禱し、人の力に及ばぬことは神に求めよ。聞かれぬとて失望せず、熱心に求めよ。

○伝道も神の御旨を先にすべきである。軽率にすべきにあらず。殊に福音を重んずべし。軽々しく之を汚すべからず。

○何事も神に頼れ。

○特に天國に入り得るよう其門を叩け。

「求めよ」 ○恵みを求めよ

「尋ねよ」 ○神を尋ねよ

「門を」 ○天國の門を

11 「善き物を賜はざらんや」 ○最も善き賜物は聖靈なり。

12 「全文」 ○「然らば」は、神は善き物を人に与へ給ふ。故に汝等は人に対して善行をなせ。之れ神の恵みに答へまつる所なり。

「人に為られん」 ○愛

「人にも亦その如くせよ」

○愛

○ナイチンゲール、リビングストーン

13
〔全文〕

○汝等、数の少なきを恐るる勿れ。先づ悔改めの門、信仰の門、十字架の門をくぐらざる者は、天國に入ること能はず。

○眞面目なる人は、毎つねづねに少数なり。多数決の誤り。バラバとキリスト。藪医者くさびしやの玄關、罫はしや網の入口は広い。

14
〔生命にいたる門〕 ○十字架

15
〔全文〕 ○世に教師多し、教へ多し。

21
〔全文〕 ○或人モハメットに問ふ。神の最も好み給ふものは何か。曰く、悔改たる罪人。最も嫌ひたる者は何か。曰く、背教者。